

聞こえないということ

梅本悦子

奨励者紹介〔うめもと・えつこ〕

手話通訳士

同志社大学キリスト教文化センター オープン・プログラム「手話教室」講師

皆さん、こんにちは。「こんにちは」は、手話でこのようにします。自分の顔を時計に見立てて、お昼の位置に長針と短針の2本の指をあてます。皆さんの中に、手話が必要な人はいらっしゃいますか。いらっしゃらないようですので、声だけでお伝えします。私は、同志社大学キリスト教文化センターのオープン・プログラムで「手話」を担当している梅本です。今日は、皆さんにお話しする機会をいただき、感謝しています。

はじめに

皆さんは、聴覚に障害がある人と会ったことがありますか。聴覚障害者といっても、ろう者、難聴者、中途失聴者など、聞こえなくなった時期やコミュニケーション方法によっていろいろな呼び方があります。手話を主に使うのは、ろう者です。

小学生の時、同じクラスにいたとか、学校に来て話をしてもらったとか、アルバイト先のお客様など、出会うチャンスはさまざまあると思いますが、道ですれ違ったなど、偶然見かけただけで「あの人は耳が聞こえない」と分かる人はいないと思います。つまり、聴覚障害というのは外見だけでは分からず、話してみても初めて「耳が聞こえない」ということが分かるのです。ですから、皆さんもどこかで会っているかもしれませんね。障害が見えないということはどのような場面で困り、どのような援助が必要なのかということが想像できない、あるいは想像しにくいということなのです。

今日、皆さんにお伝えしたいことはたくさんあるのですが、時間も限られていますので、「聞こえないということ」をテーマに、三つの柱に沿ってお話ししたいと思います。

手話の特徴

皆さんは手話を見たことがありますか。表情豊かに、生き生きと手話を使っていますね。手話はろう者集団から生まれた「目で見る言葉」で、音声語とは異なる文法をもつ視覚言語です。日本語と手話の違いをお話ししましょう。

日本語には音声言語と書記言語があります。音声言語は母音と子音があり、書記言語はひらがな・カタカナ・漢字があります。

手話は手指の動きを中心に、表情・視線・口形・首や体の傾きなど体全体で表現します。書記言語はありません。地域によって表現が異なる「方言」もあります。音声語と同じく、国によって手話も異なります。ですから、私が教えている手話は、日本手話ということになります。

手話の大きな特徴としては、音声語は線条性であり、手話は同時性であるということです。たとえば「父

は本を読みながら、食事をしている」ということを伝えたい時、日本語であれば「父は本を読みながら」何をしているか、そして「食事を」するのかしないのか、肯定か否定か、何が言いたいのかは最後まで聞かなければ分かりません。これが線条性の特徴です。しかし、手話で表現するとこのようになります(手話表現)。つまり、視覚言語では同時に複数の情報を表すことができる同時性をもっています。これが手話の難しさでもあり、楽しさでもあり、手話の素晴らしさだと思っています。

「手話とジェスチャーは同じでしょう」と言う方もいらっしゃいます。ジェスチャーから生まれた手話もありますが、手話は記号化された言語であり、ジェスチャーは単なる身振りですから、同じではありません。たとえば先ほどの「父」という単語をジェスチャーで表すとしたら、どのようにしますか。父親のイメージは皆さんそれぞれ違います。伝える人と受け取る人のイメージが一致しなければ、言いたいことが正確に伝わりません。ジェスチャーでは抽象的な言葉表現することはできませんし、ジェスチャーだけで会話を長く続けることもできません。繰り返しになりますが、手話は言語なのです。

言葉の役割と情報

言葉には客観的な情報を伝えることと、主観的・心理的な情報を伝えることの二つの機能があります。どちらの機能が主になるかで話し方は変わります。でも、どちらも通じ合うことが基本です。聞こえない人の立場に立って考えてみましょう。聞こえない人は、音だけではコミュニケーションからも情報からも疎外されます。リアルタイムでは伝わらず、目で見て分かる方法になって初めて、聞こえる人と同じ情報を得ることができるわけです。でも、私たち聞こえる人間は、聞こえることが当たり前になっていて、音だけでは伝わらない人がいる、ということになかなか気づくことができないのです。

皆さん、朝起きるところから学校に来て授業を受け、家に帰ってテレビを見たり家族との団らんを楽しむところまでを想像してみてください。朝は目覚まし時計で起きますね。あるいは、起こしに来るお母さんの足音で怒っているか、もう少し布団の中でぐずぐずしていても大丈夫か分かります。お湯が沸いたことを知らせるのも、車のクラクションも、電車のアナウンスも、学校の授業も病院での呼び出しも、すべて音の情報です。聞こえない人にとっては、電車が遅れていても、なぜなのか、どれくらい遅れるのか、車内や駅のアナウンスだけでは全く伝わりません。テレビを見ても字幕がなければ分からないし、「なんで笑ってるの?」と聞いてもテレビを楽しんでいる家族は「待って、後でね」。一緒に笑うことも減ってしまいます。これらはすべて情報なのです。聞こえない人たちは視覚で情報を補っています。でも、それには限界があります。

災害時の緊急情報は命にかかわります。東日本大震災では、津波の情報が伝わらず逃げ遅れたろう者がいました。NHKの調査では障害者の死亡率は健常者の2倍という結果が出ています。「津波が来ます。高台に逃げてください」という必死の呼びかけが、聞こえない人には届かなかった。命からがら避難所に行っても、水やおにぎりが配られることも、放送だけなので分からない。我慢を強いられる状態にあったわけです。また、豪雨で川が増水したのを知らず、市役所からの連絡も遅れたため家の屋根にのぼって救助されたという人もいました。つまりリアルタイムに情報が得られないということは、単に情報が遅れるということではなく、その情報をもとに次にどう動くべきかという、行動の判断ができないということなのです。判断が遅れると、手遅れになってしまうこともある。「情報の伝達」とは命にかかわることだというこ

とも、知ってほしいと思います。避難所などで紙に書いて知らせてくれる人がいたら、本当に助かりますね。

コミュニケーション

コミュニケーションは社会生活には絶対必要なものです。皆さんは、入学したばかりの頃、誰かと友だちになりたいと思った時、どうしましたか。まず隣の人に話しかけますよね。そして「意外と話しやすい人」とか「好きな映画が同じ」「へえ、そんなことに興味をもっているんだ」とか、話すことによって友だちになるきっかけをつかむと思います。では、聞こえない人はどうでしょうか。ニッコリ笑って「おはよう」までは誰でもできます。でも、それ以上いろいろ話したいと思っても、相手のことを知りたい、自分のことを知ってほしいと思っても、コミュニケーションが成り立たなければ話は弾みません。みんなが楽しそうに笑っていても、自分だけ一緒に笑うことができない。でも、孤独になりたくないから、独りぼっちと思われたくないから、何が楽しいか分からないままにみんなに合わせて笑う。楽しいふりをするわけです。本当に多くのろう者が同じ体験をしています。豊かな人間関係を築き、信頼関係を高めるための第一歩はコミュニケーションです。

これは、友だち関係だけではありません。聞こえない人からよく言われるのは、「家族の中であまり話をしなかった」ということです。両親が手話ができなければ親とも簡単な話しかできないし、テレビも字幕がついてなければ一緒に楽しめない。「食事は家族団らんの一番だと思うけど、いつもさっさと食事を終えて自分の部屋に入り本を読んでいた。本が友だちだった」と言うのです。もちろんすべてのろう者が同じ環境にいるわけではありません。聞こえる家族は、誰も疎外する気はないし、悪気はないのです。でも、聞こえない子どもがどんな孤独な世界にいるのかは、親であってなかなか理解できることではありません。高齢者も同じです。高齢難聴になって家族とうまく話が伝わらないおじいさんやおばあさんのもどかしさや寂しさも、きっと同じではないかと思います。

社会生活でもコミュニケーションは必要です。会社に就職して、仕事の連絡や指示はパソコンを使うので不便はないけれど、周りは聞こえる同僚ばかりでおしゃべりする仲間がいない。歓送迎会や忘年会などいろいろな人と交流したくてもできず、人間関係がうまく作れない。このような悩みをもつろう者はたくさんいます。また、ハローワークなど公的な相談機関はさまざまありますが、手話通訳者を常時設置していないため、ろう者には使いにくい社会資源となっています。つまり、コミュニケーションが音声中心の社会になっていることから、個人の権利が守られていない現状がまだまだあるということなのです。

私たちは、誰も一人では生きていけません。人と人との関係の中で、初めて個性が生まれ、人を好きになったり、相手の立場に立って考えることができるように成長したり、人間らしく暮らしていけるのだと思います。その人間関係を作る第一歩は、コミュニケーションではないでしょうか。ただ、すべての聞こえない人が手話を使っているわけではありません。コミュニケーション手段には筆談や読話などいろいろあります。手話を知らないからと言って、聞こえない人に話しかけるのを躊躇しないでください。話しかけられた時は無視しないで、さまざまな手段を使ってコミュニケーションを取ってみてください。そして「あなたと話したい」「あなたに話している」ということを伝えるために、必ず相手と正面から向き合い、目と目を合わせてから話しかけてください。

一番大切なのは、気持ちを伝え合いたいと思う心です。自分が言いたいことや気持ちを相手に伝え、相

手の言いたいことや気持ちを受け止める。それには同じ「言葉」をもたなければ伝え合うことはできないのです。聞こえない人たちは、音声の代わりに視覚を使って伝え合っています。しかし、手話ができる人はあまりに少なく、聞こえない人は社会の中では圧倒的な少数者であるがゆえに、社会的なバリアがまだまだ多く立ちふさがっていると云えます。そのバリアを少しでも低くすることは、聞こえる私たちの役割だと思っています。

私たちにできること

聞こえないとはどういうことかが、少しは分かっていただけでしょうか。私は手話を教えていますが、手指の形だけを覚えてほしいと思っているわけではありません。聞こえない人たちの暮らしや教育、これまでの歴史や福祉の現状など、折に触れて話をするようにしています。そして、もし自分が聞こえなかったら日常生活でどのような不便があるかを、グループ討議などで考えてもらっています。

人を見る時、その人の障害から見てしまうということはないでしょうか。多分あまり意識せず「〇〇さんは車いすの人」「〇〇さんは聞こえない人」と分類してしまっているのかもしれませんが。私自身もそうでした。でも、手話を学び、聞こえないとはどういうことかを知り、ろう者との交流が深まるにつれ、障害のある・なしからスタートするのではなく、誰もが一人の人格をもった人間であるというところから見ていけるようになってきたかなと思います。そして、聴覚障害とは情報とコミュニケーションから疎外される障害だということも、覚えておいてほしいのです。

いつでも、どこでも、どんな時も人とコミュニケーションができ、人との絆を結ぶことができ、聞こえる人と同じ情報をリアルタイムで得ることができる社会。そのような平等な社会を、聞こえない人と力を合わせて作っていきたいと思います。障害がある人は、常に助けが必要な弱者ではありません。的確な情報があれば、自分で判断でき行動でき、協力し合えるのです。私たちにできることは、いっぱいあります。何をすればいいのか、ぜひ一人ひとりが考えてください。そして、手指だけの「手話を学ぶ」のではなく、自分の人生や生き方に照らしながら「手話に学んで」いただきたいと心から願っています。

それでは最後に少し手話の練習をしてみましょう。コミュニケーションの最初は挨拶です。

〈おはようございます こんにちは こんばんは ありがとう 元気です 大丈夫です 助けてください〉

質問の時は、問いかける表情で伝えます。

〈元気ですか 大丈夫ですか お手伝いしましょうか〉

敬語を使いたい時は、手話を丁寧にゆっくりしてください。

〈ありがとうございます〉

いつか聞こえない人と出会うことがあると思います。その時は、一つだけでも構いません。今日覚えた手話を使ってみてください。そして、聞こえない友だちをいっぱい作ってください。

十分にお伝えできなかったと思いますが、最後までお聞きくださりまして、ありがとうございました。

2018年1月10日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録